

# ご挨拶

宮司・代表役員 **黒田 忠雄**

御嶽山の長い冬も、三月八日の春季大祭（祈年祭）が近づきますと、

確実に春へとその役目を移しながら、北へ去って行きます。

春のこのお祭は、古くからお山開きのお祭とも言われ、講中崇敬者のご参拝もこの日を境に、次第にその数を増し、日に日に御嶽山も賑わいを見せて参ります。この「武州みたけ」第四号が発刊される頃が、恰度その頃と思われませんが、暖い春が待たれる最今ではありません。

さて、不肖私、昨年十一月五日付をもちまして、当神社の宮司代表役員に就任いたしました。固より、浅学菲才の身ではありますが、誠心誠意神明にご奉仕を申し上げ、御嶽大神のご神威の昂揚に努める所存でありますので、関係の皆様方の旧に倍しての、ご指導ご鞭撻を心からお願いを申し上げます。

宮司就任後、初の平成七年の元朝を身を引き締めて迎えました。

海拔九百三十メートルの山頂の社から、遠く房総半島の先端と覚しき水平線から昇る初日の光を拝み、併せて遙かに皇居を遥拝しつつ、皇室のご安泰と国民の幸福をお祈り申し上げました。続いて、午前八時、御嶽大神のご神威を仰ぎ奉る大勢の初詣の参拝者を迎えるなかで、元旦祭を斉行し、五穀豊穰、国家、国民の安泰を大神に祈念をいたしました。

本年は、我が国にとって、終戦五十年と言う記念すべき有意義な年であるとともに戦争の無い平和な五十年目を迎えた年でもあると言う

ことが出来ます。

小学三年生の夏の日、終戦の詔勅を涙で聞いてから、五十年。今、日本は世界に冠たる平和国家として、又経済大国としてその動向が世界中から注目されておりますが、世界の平和のために、国民一人ひとりが、五十年間に蓄積した力と心をもって、活動すべき時であろうと考えております。いろいろな機会を捉えながら、神道人の一人として活動して参る所存であります。

神社の運営に關しましては、平成五年酉年式年大祭の記念事業として実施いたしました神楽殿の建設を中心とした境域の整備事業は、多くの方々のご賛同とご浄財のご寄進により無事完了をすることができましたが、更に整備すべき点が山積いたしておりますので、十年後の平成十七年式年大祭年を最終年度とする、神域整備中長期計画検討委員会を発足させ、財政計画と合わせて、鋭意検討を進めているところであります。厳しい財政運営のなかではあります、十年計画のもと、ご神域の計画的な整備を図り、大神のご神慮にお応え申し上げる所存であります。

崇敬者各位のご協力無くしては神明へのご奉仕はもとより、神社の運営の万全を期すことは出来ません。今後とも特段のご支援を賜わることをお願い申し上げます、合わせて皆様方の更なるご発展をお祈り申し上げます。上げてご挨拶いたします。

## 参拝に想う

馬絹講々元 吉田 一男

川崎市馬絹御嶽講は、武蔵御嶽神社の大前に、毎年「太々神楽」を奏上して参拝してまいりました。本年で七十四回目の神楽奏上を迎えます。古老からの言い伝えによりますと、馬絹講の歴史は古く、講結成以来二百有余年を経ているのではなからうかと言われております。ちなみに、隣りの部落の土橋講においても、「寛保四年二月」（一七七四年）の年号の有る御嶽講の古書が木箱に保存されており、今より二百二十年も前に既に御嶽講が現存した事実が書き記されております。馬絹講におきましても、おそらく縁深い隣り部落と同時代に、講が出来たものと思われる。

武蔵御嶽神社の神主服部喜助宅にも、

嘉永七年

檀家姓名帳

橘樹郡馬絹村

と言う文書が有り、馬絹村の人達に神社のお札が配られていたことが記されております。この文書から見ても現在まで長い間、御師が当地に出向き、各戸を訪れ御嶽山のお札を配り、秋には収穫された穀類などを集め神にお供えたことが記されております、そして人々はそのご神徳に深く感謝していたものでありましょう。時代の変せんと共に、多少の違いは有るにせよ、今もなお親から子へ、子から孫へと、この信仰は引き継がれ継続されております。

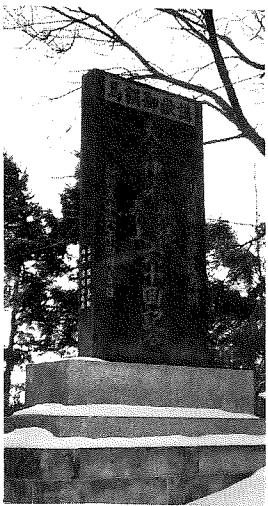
毎年四月九日を参拝日と定め、講中一同御嶽山へ登り、太々神楽を奏上し参拝しておりますが、この様な事も御嶽神社の御神徳にあると言えます。

昭和五十六年四月、「太々神楽継続奏上六十周年」を記念して、御神徳に感謝し、又更なる講中一同の安全を祈願して、当時の田辺園司講元を中心に御師宅に記念の額をかかげ参道に記念碑を建立しました。祖先からの、厚い信仰の上に成り立った、この参拝行事は、これからも引継がれて行くものと信じております。

# 神社参拝記



太々神楽（三神和合の舞）



【太々神楽継続奏60回記念】の碑